

---

# 仮題 コーヒー

さとし2001

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮題 「コーヒー

### 【ZPDF】

Z7069C

### 【作者名】

さとし2001

### 【あらすじ】

夏の暑さから逃げるよつに入った喫茶店でふと高校時代を振り返る。そして現実に変える。たぶん当たり前で楽しかったから今でも頑張れると実感する。

(前書き)

たぶん10代にはわかりづらいかも。 疲れた大人向けの短編です。

何年かぶりの猛暑で街がうだつていて。

100m歩くと、喫茶店に逃げ込みたくなる口差しの中、俺は仕事の合間のオアシスを見つけた。

「まだ時間が空いているし、少しいいだらう」

俺は水分補給と糖分補給のために喫茶店に入った。

店内のいたるところに観葉植物が目に付くのは都会だからか。「みんな疲れているのかね？」と疲労で砂みたいな脳みそが暴走している。

「いらっしゃいませ、お好きな席にお座りください。」店員に促され店内を物色する。

少し迷つて窓際のテーブルを取つた。

「ケーキセット。ホットコーヒーでもらえます?」

「はい、かしこまりました。セットドリンクはホットコーヒーですね。」

注文を取つて水を飲み一息。

熱暴走中の脳みそに理性が帰つてくる。

「あつちーよなあ。」

自然と口から独り言がこぼれた。こんなに暑いのはいつ以来だろな。左手が勝手にタバコを準備している。火をつけて午後の予定を確認する。

注文した品が来るまで時間が出来た。

ほっとしながらタバコの煙を吐く。

煙を吐く。

口から上の煙は視界を染め、空気を染めていく。

ゆっくりとつらすらと。自分が煙に溶けていく気がする。自分と煙の違いが面白い。肌から煙が出ている気がする。そう思つて目を閉じると、途端にグルグル回りだす視界に舌打ちをする。

「最近、忙しくて睡眠足りないからなあ」

人間まともに寝れなくなると面白い。思考はネガティブに。でも調子はハイに。

当たり前の事が面白くなつてくる。

「すっかりコーヒーが日課になつちまつたな」

疲れをこまかすためのコーヒー。糖分とカフェインを血液にぶちこんで一日の勢いを貰う。

結局疲れは取れず、またコーヒーを飲む。

眠気覚ましの苦いコーヒー。仕事の友達。俺のパートナー。

「休みまでの辛抱だよな」

愚痴を言いながら外を眺める

しかし暑い夏だ。いつ以来か。

「大学? いや高校の時が一番暑かつたかなあ。」

あの頃の思い出は多い。夏休みの一日。平日の一日さえも記憶に残つていてる。

「なんで いまは残つてないんだ?」

イベントは覚えてる。先週の内容もミーティングも覚えている。けれど。あの頃ほど原色で、温度と、匂いまで覚えている記憶は少ない。

「年取ると時間まで早く過ぎていくのかねえ。」

ぼつと 景色を見る。

目線をテープルに戻す。

灰皿からタバコの紫煙が昇っている。

タバコ始めたのもあの頃だけ。高3に友達から貰つたんだよな。思考が記憶をたどる。紫煙の匂いが思い出を刺激し、宙を彷徨つていた視線が紫煙の先に焦点を合わしていく。

煙と自分。

境界が溶けた自分は。

とうとう現実と過去を混ぜ始める。

思いは想いへ。記憶は自分を。自分の源記憶を呼び覚ます。まるで目が覚めるように俺は高校時代を思い出していた。

アレは夏。受験を半年後に控えた3年。学校の行事は大体終わり、試験。試験。試験と教師が騒ぎ出していた。

今日も国語は漢字、古語の単語テスト。数学、英語ももれずに何か宿題が出るだろ？

「あー もう脳みそ一杯！ 覚えられませんー！」

大声を上げて伸びをする。

窓から覗く空は嫌味に青で。入道雲が腹立つほど白い。

「あー 夏だ。夏だ。夏だ。俺の甲子園は始まつたばかりですよー」

背中を叩かれる。

「何回“あー”つて叫んでるんだ、「つるせえ」笑いながらプリントを丸めた手を振つてる奴がいる。

山村。バカ・能天氣・運動神経で生きているようなやつだ。しかし成績はいい。

「オイオイせつかく覚えたのが今ので忘れちゃったよ。ジー責任とつてくれるんですかあ」

「いやいやいや 多分覚えたつもりで覚えてなかつたんだよバカだから。むしろ目を覚ましてやつた分、感謝して欲しいね」

「えー なんですかなんですか、それ！ しおがないなあウドンで手を打とうじやないか」

「どんな話だよ…」

「いやだから、これが“手打ちウdon”で話つうまい…! ほれ、お

「これ

「やだね」 次のテストの点数が悪い方がおじるつてのはどーよ? 「おつ言つたね」 しじうがないなあ じゃあ快くおじりせてやる よ…!」

「へつ ラーメンは大盛りな。それ以外は食えねえ」

「大盛りありますか! それはますます楽しみになつてまいりました ほれ! 帰れ! 勉強の邪魔だ。これからガリ勉するから」

「減らす口を」

いつも通りのじゃれ合い。女子には胡散臭そうに見られるが視線など怖くない。それが友情。

結局そのままラーメンをおじられた。

次の日、机に座つていると後ろから山村が来る。

「どーした」

「いや、遊びいかね?」

「はつ? 何言つてるんですけどか まだ2時限目ですよ…! バカですか貴方!」

「うるせーなー あれだ体調不良になるんだよ」

「なぜに。顔色はいいじゃない」

「今日のテストあるじゃん。」

「あるね~ 今日も単語よ!」

「勉強するの忘れた…」

「はつ…? マジで言つてますか? つーかテストの存在自体忘れてた でしょ?」

「おう!」

「いばんな!」

「んで悪い点を残したくないので。付き合え。」

「なんつー言い分！ てかヒテー俺勉強してるんで

「いや、悪い点を残すのはプライドがゆるさん」

「俺のことは度外視じゃんよ！」

「しおのがない」 きつ決まつた——」

「飯がおー」りなら許す。

「おもひ」

「行くわ」なんか笑える。

体調不良で帰る。行くあてはない。  
しかも田舎だからスゲー目立つ。  
チャリで遠出する。

「何処に行くよ？」

「海とかいいんじゃね？」

いやだ！」笑う

「ゲリセジとかひつてのほかだ

「ケリセントかも」でのほかたよな」と笑う

۱۶۰

卷之三

「まだか毎な～！！」

「あと少しだけ！」

「あと少しー、何回目？」

知るか

「何分よ！」ホントがホント

「20分くらいじやねー」

「バカに乗つたばかりにあちーーー！」

「つむせー 乗ったお前もバカなんだよー」と笑える。

ブーン。車の音が遠くに聞こえる。

「オイ、やばい！車来た！！」

「隠れる隠れるー！」

「て、オイ！……!!」パトだぞ！！」

本気で焦って隠れる。なんたって制服だ。100m先だって見分けがつく。

一本道。必死にペダルをこぐ。

道の脇の木に張り付く。自転車は草むらに投げ込む。

ブーン。

車が過ぎていく。

なんてことのない、普通の軽自動車だった。

「マジかー！」

「てめえ目が悪いんじゃねーかーかー！」

緊張から一転、悪態をつく。

でも海が近くなつた。

その日の海は、何もなかつたが、着く前で十分楽しかつた。海風に向かつてタバコを貰う。

何となく火をつけ吸う。普段は吸わないが、海で吸いたくなつた。この日から何となく吸い始めた。

あんなに仲良かつた山村とも最近は連絡をしなくなつた。

紫煙で思い出す過去。

「タバコだけ続いちやつてるのかね。」

まだ煙の立つている灰皿を見ながらつぶやいた。

結局何も変わっていない。スピードが上がったのは必死なだけ。つまりなくしているのは自分自身。

「コーヒーも続けると何か見えるのかね。」「いやきっと来るはずだ。

そして今の必死さを将来から眺める日が来るんだろう。

タバコを始めた高校のよう。

コーヒーを飲み始めた大学へ。

明日のコーヒーはきっと苦い。

でも明日もコーヒーを飲むだろう。

たぶん今度はコーヒーを透かして今日を思い出せるから。タバコの煙の向こうよりは大人で、でも同じくらい必死な時代が見えるだろ。

それがわかるから今日も無理してコーヒーに口をつけた。  
「さて行きますか。」

必死になるのは怖くない。眠気を覚ます為のコーヒーもきっと必要なくなる。

いつか昔いコーヒーを飲んだ時、必死でも楽しかったと言つたために。思い出を裏切らない。俺はきっと頑張れる。

(後書き)

コレからボリュームを増やすか検討中。  
読んでくださった方。ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7069c/>

---

仮題 コーヒー

2010年11月24日15時53分発行